

近世石清水八幡宮における吉田神道の受容と社務家

竹 中 友里代

はじめに

近世石清水八幡宮の社務職は、慶長五年（一六〇〇）徳川家康社務廻職状によって、田中・新善法寺・善法寺・檀の四家が將軍代替わりごと、あるいは、社務検校の逝去によって、順次に従って交替して勤めることとなる。この職には、社務職領として十四石二斗七升が、社務に付属する政務役料として兼官領五石が当てられる。社務検校就任により神領支配する社務家とは、十歳代で得度して童昇殿し、僧形であるが、妻帯して嗣子をもうけ一家を継承する。近世史料では、所司代・町奉行所からの触書や男山山上堂塔寺社等の公儀普請、山下住民の争論などの政治向きや石清水の身分構成の中で登場する。⁽¹⁾

再興された放生会の祭列や神前での着座位置を示す図⁽²⁾から、石清水を総帥することは見て取れるが、石清水八幡宮寺・護国寺の検校である社務が安居神事・放生会・臨時祭や朝廷・公儀の命による祈祷などにおいてどのように関わっていたか、また社務家個別の信仰や社務本人が行う祭祀については言及されたことはない。本稿では、吉田神道に入門した石清水神人の事例を示すとともに、田中社務家相統一件

から吉田神道伝授に至った田中要清の事績をとりあげ、禁裏御師職田中家が自邸内で行う祭祀の様相から、神仏習合といわれる石清水での近世祭祀のあり方を明らかにするものである。

一、田中要清の生い立ち

まず、田中要清が八幡ではなく遠く尾張で成長した経緯から述べよう。尾張藩祖徳川義直の生母である相應院（一五七六―一六四二）は、八幡の志水宗清の女というが、「社務家田中祠官家系図」等によると長清嫡女の女、或いは長清の女とされる。田中教清没後には、田中本家の相続人がいなくなり、東竹甲清の息男である長清は、東竹家を去って田中家を襲った。このため東竹家は中絶した。甲清の女・龍雲院加月妙慶、（?―一六〇八）は、長清の妹であり、志水宗清の室となり忠宗・相應院をもうけるが、東竹が中絶したことにより系図には長清の女と記すとある。いずれにせよ相應院は田中本家・東竹家双方ともに深い縁故で結ばれていた。

長清の跡を継いだ秀清の後継は敬清であり、寛永九年（一六三二）

社務検校に補任された敬清には、後室に善法寺舜清の女（正受院）があった。敬清は、病身により田中家嗣子に善法寺家から幸清の次男召清を迎える。ところが寛永十四年敬清と後室正受院とのあいだに実子（幼名久米丸、久米松とも）が誕生する。後の田中要清である。田中家正統をめぐって正受院と召清との確執が生じる。寛永十七年敬清逝去によって、ついに正受院は久米丸と共に尾張に下向し、相應院との縁故を頼って歎願に及ぶ。正受院と久米丸は、尾張藩祖源敬公德川義直と二代光友の膝下に留め置かれ、久米丸の養育と勤学の大恩を受けることとなる。⁽⁴⁾

存生中は召清と正受院との間柄を取持っていた相應院が、寛永十九年六十九歳で逝去し、正受院は、大きな寄る辺を失うこととなった。その後、十三歳に長じた久米丸は、京にのぼり慶安二年（一六四九）二月二十二日、青蓮院宮・天台座主の尊純法親王を師主として得度し、要清と名乗る。⁽⁵⁾この時尾張藩からは金子五百両が用意され、家老の志水家から杉崎伊右衛門、山下手正からは、沼田孫十郎の両名が添え役として都へ従い、殿上においては、要清の姉武藏局の取計らいで、得度は厳重に執り行われ、儀式後はすぐに尾張に立ち帰ったという。

一方、召清は、寛永十二年（一六三五）、妙法院宮を師主として十一歳で得度、童参内を済ませ、翌年には十二歳で法眼位を得る。寛永二十年には、十九歳で後光明天皇の即位後に参内し、明暦四年（一六五八）には二十四歳で権別当権少僧都に任ぜられた。正受院の訴えが無ければ、おそらく社務としてつつがなく田中家の家職を勤仕していたであろう。

十歳年長の召清に対し、田中家の家督返納を訴えることを憚られていた要清も二十三歳となった万治二年（一六五九）のことである。長年の正受院の懇願が聞き届けられ、二代藩主光友卿の下知が下された。田中家相統は要清と裁定、召清には金子五百両で隠居を命ぜられ、本家知行のうち百石を割き東竹家が再興された。召清は、万治二年十二月には三十五歳で法印に叙任、香染袈袋を勅許、同三年には権大僧都に任ぜられ、東竹屋敷が普請される。

尾張家からの田中家相統の裁定を受けると同時に、要清は吉田神道に入門し、神道伝授するよう命ぜられる。「神祇宝典」を編纂し、神道に造詣が深い徳川義直及び二代光友の意向によるものである。田中家正統第二十一代田中要清は、万治四年三月二十五歳にして八幡に帰り、田中本家に入る。吉田神道本家からは、祝の樽酒と使者鈴鹿内膳が遣わされた。要清は神前に伺候して次の一首を奉った。

榊葉のゆふかひありて

ことしより心のまゝに神につかへん

田中家正統を主張し、苦節に報われたことを悦び、朝家の御師職として一心をなげうち片時も怠りなく神に仕えることを誓う。八幡神への崇敬をしめす要清は、宮寺の仏徒ではなく神に仕えることにその決意を示している。

二、石清水八幡宮と吉田神道

石清水八幡宮と神道本所の吉田家との関係を知るために、吉田家の玄関日誌である「御広間雜記」⁽⁷⁾を素材とする。慶安三年（一六五〇）から明治二年（一八六九）までの六六九冊に及ぶ大分の記録であるが、石清水関係者と年月日・記述の概要を抽出し、記録が残る慶安三年から正受院一周忌の延宝二年（一六七四）までを表1にまとめた。表に沿ってみていこう。

正月の年頭の挨拶には八幡神人大森六右衛門が、慶安三年から毎年八幡特産の牛蒡や桐箱入の扇子等を持参するが、万治二年（一六五九）正月を最後に、以後は田中要清が毎年吉田家へ年頭御礼や見舞と称して頻繁に吉田家を訪れるようになる。

また慶安三年十二月に歳暮の挨拶に八幡の与九郎が訪ね、翌四年二月には伴与九郎の取次ぎで新善法寺家が御礼に来訪し、萩原兼従に面会している。

ここでも与九郎と社務家新善法寺家の関係を知る手掛かりとして、次のような文書がある。

奉伝授唯一神道、從今月今日、惡逆無道不可至、予雖為一子毛頭
不可授与、仍^而此道之龜鏡也、勿^矣愼怠

新善法寺權別当

正保四年正月吉辰

晃清（花押）

伴与九郎殿

正保四年（一六四七）正月に神道伝授にあたって、今日より惡逆無道を行わないことを新善法寺晃清（一六二七〜一六九七）が伴与九郎に誓約している。惡事を働く者の中にも神道伝授を望むことがあったということであろうか。伴与九郎とは、石清水八幡宮宮守神人伴与九郎久金である。そして三年後の慶安三年二月に次の文書がある。⁽⁹⁾

今度神道伝受之儀頼入候処、元本宗源唯一神道之奥儀、一句^モ
不殘御伝授被成候段、別^而忝存候、御恩之程忘置間敷候、向後者
貴殿并御子息^与拙者親子同前^ニ存候、貴殿老耄之後ハ御子息達へ
貴殿より致伝授候通、神道之奥儀一句^モ不殘可致伝授候、仍
此道之龜鏡也、勿^矣愼怠

新善法寺權別当

慶安三年

晃清（花押）

二月吉辰

伴与九郎殿

新善法寺家が吉田家を訪問する前年の慶安三年二月、新善法寺晃清の依頼によって伴与九郎から神道伝授をうけていたのであった。晃清とは、新善法寺家第十二代で、寛永二十年（一六四三）十七歳で得度、正保二年二十三歳で權別当に補任されている。石清水神領を支配する社務家の当主が宮守神人という神饌を準備する身分的には下位の神人から伝授をうけている。伝授の恩を忘れず親子同然となり、与九郎が

老耄した後は、与九郎の子息に返り伝授し、神道の奥義が絶えないようにするという。宮守神人家文書中には、翌慶安四年十一月に新善法寺晃清が天照両皇太神宮・八幡三所はじめ八百万神を、おそらく自邸内であろう社に勧請したとみられる祝詞がある⁽¹⁰⁾。

その後も両家の関係は継承され、元禄十二年（一六九九）三月には、新善法寺行清から伴与九郎光金に対して、次のような誓約が出された⁽¹¹⁾。

誓約

一、本迹縁起神道之事、当家^与貴殿祖父相互^ニ致伝受来^ニ付、先年従吾師故僧正、三壇^并勧請遷宮作法加持守^等過半、雖被致伝授候、其方若年^ニ付、諸太事奥義等相残故応願今亦^予令伝授畢、此上者向後、親子之遂因至子孫互^ニ致連綿、其器量次第奥義一句^茂不殘可為相伝候、仍神道之亀鏡也、勿愼怠^矣

寺務別当

新善法寺法印権大僧都

行清（花押）

元禄十二年^巳卯年三月廿三^{（マ）}烏

伴与九郎光金殿

与九郎光金は、貞享元年（一六八四）四月に宮守神人伴信金が卒去したことにより、宮守一行事に補任され伴家を世襲、享保五年（一七

二〇）に没するまで宮守神人を勤めている。貴殿（光金）の祖父とは、先にみた慶安三年（一六五〇）の伴与九郎久金をさす。行清（一六七〇～一七二四）の師である故僧正とは、新善法寺晃清で、久金より伝授された後、延宝八年（一六八〇）検校に補任、貞享三年権僧正に任ぜられ、この誓約の二年前元禄十年（一六九七）に逝去している。三壇・勧請・遷宮等作法の過半を伝授されたが、光金はいまだ若年ですべてを伝えられていない。残りを願いに応じて一句も残さず相伝することを誓約している。慶安の伴久金と新善法寺晃清の師弟関係は、孫の光金、行清の代にも互いに伝授し合い、両家の関係は、連綿と継承されるのである。

ところで、宮守神人伴家はいつ、どのように神道伝授をうけたのであろうか。同家文書中に次の二通がある⁽¹³⁾。

神道伝授^ニ付結戒之事

一 惡逆不道仕間敷候、慈悲心致專一随分改雜穢成程諸神之御奉公可相勤事

一 万事向後者、貴公様之御指図次第^ニ御異見ヲ可請事

一 從貴公様御伝授被成被下候旨、一句^モ不殘、御子息^ハ伝授可仕候、弥貴公様共御子息共親子同然^ニ可奉存候、諸事疎意^ニ存間敷候事

右之旨、毛頭^モ違背仕間敷候、仍^而是神道之亀鏡也、勿愼

怠^矣

寛永拾八年

伴与九郎大伴宿祢久金^在判

九月吉辰

とめ

従五位上交部式部少輔入道

法橋寿仙庵玄昌様

今度神道伝授被成被下候段別而忝奉存候、毛頭モ無漏、他家予雖
為一子不可授与、仍而此道之亀鏡也、勿慎怠矣

寛永十八年

伴与九郎大伴宿祢久金在判

九月吉辰

とめ

従五位上交部式部少輔入道

法橋寿仙庵玄昌様

寛永十八年（一六四一）九月に神道伝授にあたつて、先ず悪事を働かない正しい行動と慈悲心でもつて、穢れのない身で神に仕えること、すべてにおいて師の指図を受け、親子同然に諸事隔意なく接すること、伝授の内容は一句たりとも漏らさず伴家の一子に相伝するとしている。伴久金から交部へ提出された誓紙の写しである。この後正保二年（二六四五）正月と二月にも同内容の誓紙二通が久金より交部宛てに出されている。⁽¹⁴⁾この年正保二年五月に「石清水八幡宮神道根元集并軍陣之深秘之書」が授与され、同九月には、「奥義三箇太事（神籬・亀卜・勸請）」が伝授された。同年十一月には、「宗源神財図」・「庭上仁弓清祓図」・「唯一神道壇場莊嚴図」・「宗源神道・十八神道壇之図」・

「清祓上・中・下巻」が伝授された。翌正保三年十一月に「神道妙行初段・火祭次第等宗源之靈法」、同年十二月に「神道三種之大事」・「日本書紀神代之上卷八雲神詠口決」と数年にわたっている。⁽¹⁵⁾これ等伝授に際しては、師が老耄し吾子一人にその器量を見立てて授与するものであるが、子息に伝えるに至るまで、他に頼む所がない時は、神道信心の者があれば、神道を附属することを付け加えている。この宛所の寿仙庵玄昌については、「神道直受血脈」によると、一条院宸筆により兼の一字をその名に代々継承した卜部の第二十二代目・卜部兼見から直伝の神道奥義を父の交部和泉守吉治が伝授された。それを継承したのが交部式部少輔藤原治昌・寿仙庵であるという。⁽¹⁶⁾

吉田神道伝授にあたつて悪事をおこなわないという、神職でなくとも当然のことが盛り込まれているのだが、慈悲心をもつて行動を正し、神道伝授に相応しい自律心を備えるという神道者の倫理観にふれる条文が看取される。そして一句たりとも違わず一子相伝し、器量等の諸事情により子息に一子相伝が叶わぬ時は、親子同然の間柄である師弟関係で返り伝授を行うこと、この文言は先に見た新善法寺見清の誓約書と同様である。吉田兼見の奥義は、交部、伴、新善法寺へと伝えられたといえる。

その後一八世紀中頃の景観を描く「石清水八幡宮全図」には、新善法寺家邸内に、新善法寺祐清（一七〇〇―一七八一）が建立した「七宝院」と称する神拝所が描かれている。⁽¹⁷⁾新善法寺家の文書を受け継ぐ林家文書には神道関係の史料は見当たらないが、その後も神道祭祀は継承されていたのであろう。⁽¹⁸⁾

三、田中要清の吉田神道入門

宮守神人・新善法寺家の神道伝授を見てきたが、田中要清の神道伝授はいつどのように行われたのであろうか。ここで表1にもどり、田中要清の記事に注目する。「御広間雜記」にはじめて要清が出現する明暦四年（一六五八）、萩原兼従から正月二十三日に宗源行事・大護摩を伝授される。要清は、八幡に入る前に尾張より上京して吉田神道奥義を伝授されていたのであった。

万治二年（一六五九）八月廿四日には、「田中要清・尾州八幡社人鈴木大和此度十八神道御法受之為御礼入来、兼従公御気色不常」とあり、田中要清は尾張八幡宮社人の鈴木大和とともに十八神道の御法伝授の御礼に吉田家を訪れている。翌三年五月四日、「社人林助衛門・栗田伝十郎・鈴木大和、長州龜山八幡之社人竹中伊織、於籠屋十八神道兼従公御相伝、以後田中要清右社人伊織下社人ト壇場へ拝参」とあり、尾張や諸国の社人らと共に神道伝授を数回にわたって受けている。

万治三年二月十七日夜には要清に切紙二十枚を渡され、一応の神道伝授が完了したとみられる。翌日十八・十九日の二日間にわたって、大元宮を創始し吉田神道を大成した神龍院梵舜の百五十年忌が行われた。吉田家の幼い当主吉田兼連、後見役で大叔父の萩原兼従、一族の兼庵翁（兼従の伯父）・左衛門佐（兼従の弟・兼英）や祝祭神人等に交わり前日伝授をうけた要清も法会に参動した。吉田家一門に比肩して法会参動に合わせた伝授であった。吉田家内部でも田中要清の神道伝授にとりわけ心を砕いている様子が看取され、尾張家の意向も反映

して、その後の要清と吉田家との深い交誼がもたらされ、吉田神道内部でも田中要清の率いる石清水の立場は特化したものとなっていく。

ここで吉田家の内部事情を押さえておきたい。戦国期から江戸初期にかけて吉田兼見・神龍院梵舜の兄弟によって吉田神道は確立し、豊臣秀吉を祀る豊国社が創設され、兼見の孫兼従は豊国社の神職として萩原家を立て、吉田神道は権勢をふるうこととなる。ところが豊臣家滅亡により吉田家は後ろ盾を失うばかりか、徳川家の信認を得られず家勢は衰退、豊国社破却で、萩原兼従は浪々の身となる。元和三年（一六一七）家康没後の神号授与を巡って、天海・崇伝と梵舜が主張する権現・明神のいずれかの論争でも敗退し、吉田家は苦しい時期をむかえる。吉田家は兼従の弟兼英が跡を襲うがその子の兼起とともに病身で十分な活動ができず、事実上は吉田家を率いていたのは兼従であった。吉田神道とは、両部神道・山王神道など本地垂迹神道を否定し、本地は神羅万象唯一神に帰するという元本宗源唯一神道であり、その奥義は血脈唯一人に秘伝を相承し、継承者が神道界を統率するものであった。こうした家内の事情により、兼英・兼起には、その活動から秘伝を継承されたとは考え難く、吉田家内では、道統の實質的継承者は、祖父の兼見から伝授を受けた兼従だけであった。¹⁹⁾

神道の極意は、事相の作法・所作礼法と教理解釈である教相（教義）があり、教相を修めたものが道統の統治者となる。事相については、田中要清と吉田家家臣鈴木鹿左京に付属させたと伝えられる。すなわち、万治二年の要清に伝授されたのは事相が中心であった。道統断絶の危機を感じた兼従は、関東から神道研究に励んでいた吉川惟足に託し、

神道の極意、四重奥儀・中臣祓・神代巻の教義を伝授し、吉田家相続人である兼連成長の後に返り伝授を約していた。

万治三年萩原兼従老齢の衰えによる病はいよいよ悪化し、七月吉川惟足は、鎌倉より上洛し、兼従を見舞った。兼従の遺言で、惟足に田中要清と石清水神人の松田如閑、この両名に各々尾張・水戸両藩主の面前で中臣祓・神代巻を一通り講釈できるように指南することが託された。⁽²⁰⁾表1の九月から十月にかけて要清と如閑は、遺言に従って吉川惟足の講義を数日にわたって受けていたのである。兼従は八月十三日七十三歳で没する。吉田山の山麓に神海霊社として祀られ社前の灯籠は松田如閑により、手洗石は、寛文元年八月十三日要清によって献納されたという。⁽²¹⁾

表1を見ると、海神霊社の法要や忌日十三日には、要清は参拝を怠らない。吉川惟足から教義の指南は受けたものの、唯一神道第五十三代である卜部兼従に従い三事の証明をうけたことで、要清が最初に吉田神道の師と仰ぐのは萩原兼従その人であった。

兼従死後は、吉田家との血縁もなく、一介の隠者吉川惟足に吉田家を託したことに一族内に反感が生じ、兼見の庶子兼庵らが後水尾上皇に讒訴するという内紛が生じた。幕府内の吉川を擁護するうごきに加えて、水戸・尾張藩の権勢を背景にして、松田如閑と田中要清等も師の吉川側に立って支持したことにより兼庵らの策謀は失敗に終わる。

寛文十二年（一六七二）四月より吉川惟足の神代巻の講義が神楽岡で行われる。各神社の神官が拝聴し、その数も次第に増え、五月には要清も講談の席に召し加えられる。五月廿二日には兼従の遺命により

兼連（兼敬）への返り伝授が行われた。要清は師兼従の念願した兼連への道統相承を見届けることとなった。

表1には、八幡からは、寛文六年豊蔵坊が神道伝授を願うが、叶わずの返答がされている。吉田神道では、両部神道を否定しつつも一乗院や英彦山などの僧侶にも伝授があり、先にみた宮守神人に伝授した交部氏は入道し法橋上人位の僧位を持つ。豊蔵坊が社僧であることを理由に拒絶されたわけではなからう。御広間雜記にはその訳は記さず、詳細は不明である。豊蔵坊が將軍家祈願所として毎年正月・五月・九月の三度一山僧侶が祈祷した神札を関東へ献上している將軍家御師故に、吉田の教義にとって不都合があったのではなからうか。⁽²³⁾

さらに表を見ていくと、寛文六年頃より八幡からは、佐野内蔵允（丞）・佐野長兵衛が大森六衛門に代わって、年始や歳暮の挨拶に来るようになる。佐野内蔵允は、志水町に居住し、安居脇頭神人十四人組に属し、次左衛門宛て十三石九斗の家康領知朱印状を所持する石清水八幡宮の神人である。⁽²⁴⁾寛文十一年より神主の紀氏も毎年吉田家に贈答・挨拶に足を運ぶようになる。寛文八年五月には、吉村（能村カ）斎宮が贈答に、同年九月には神原喜右衛門が鳥食用許可に、元禄六年（一六九三）には田中家家臣の鹿野与吉郎が宗源殿十八神道伝授を受けるなど要清伝授以降は、田中家家来をはじめ石清水関係者、また要清が同道して吉田神道に伝授を求める者が出現する。⁽²⁵⁾

ある大名家や嫁いだ内室とその家臣を含め多くの武門からであった。要清の内室元子は松平日向守信之の息女である。信之の母・松光院殿をはじめ、京の公家中院家や下野・尾張・常陸国の八幡宮神官からも寄進があった。八幡からは、神宝所神人谷村徳左衛門・同重右衛門等七名に、科手井上藤兵衛等、総勢五十九名が名を連ねていた。神樂再興には、尾張藩とそれに連なる大名家や公家、要清の吉田神道修業時代よりの旧知の諸国八幡宮にも及んでいる。

五、神祇殿上棟

遷宮や放生会などの石清水八幡宮の神事では、本殿前で俗別当・神主・検知の神官が祝詞奏上などの祭儀を執り行うが、田中要清は帰幡した後、神道祭事を八幡のどこで、どのように行っていたのであろうか。

「男山考古録」によると田中家邸内には、神社があり八幡宮が勧請されていた。邸内の八幡宮の前には神祇殿があり、それを榊山と称し、尾張藩主光友が再建したという。八幡宮の傍らには、四所社・二十二所社と神祇殿前の西に武末霊社の小社があるという⁽³²⁾。十八世紀頃の「石清水八幡宮全図」⁽³³⁾を見ると田中屋敷の敷地内には北西に檜皮葺の八幡宮が南面してあり、その前に四間六間の瓦葺の神祇殿、八幡社の両脇には板葺の四所社・二十二所社等が描かれ「考古録」の記述に合致する。

この神祇殿について、石清水八幡宮所蔵の「神祇殿指図上棟始終之

記」⁽³⁴⁾（史料六）をみていこう。

神祇殿は、貞享二年（一六八五）に創設される。田中家は、武内宿祢の後裔であり朝廷の御師職・八幡宮の根本の祠官として邸内に八幡神と武内宿祢を勧請していたが狭隘な場所にあり、西南に敷地を拡張、高く築き上げたところに祀りたいという数年来の願望があった。寛文期に後水尾法皇から修補金を賜い、今年貞享二年に尾張藩主光友と正室で三代將軍家光の娘千代姫、嫡男綱誠、二男義行、側室勘解由小路御方（松寿院）と三男義昌の尾張藩主の家族からの篤い恩恵を受けた。朝廷の祈願所である八幡宮において、神官が籠る齋殿を建立するといふ。この齋殿が田中家邸内の神祇殿であり、そこで宗源神道として潔斎することで神威増大をはかろうというのである。

「神祇殿指図上棟始終之記」には、境内の諸社の建図と神祇殿の平面図が記される。八幡宮は旧殿社を修復し、一段高い石垣の上に祀る。八幡宮の前に新造された宗源殿の規模は、梁間三間、桁行六間で、周囲に高欄を取り付け、向拝は、社殿との取り付けを一段下げた鞠（しころ）廂を設置し、虹梁の上には古材で彫物のある臺股を取り付ける。この図面をもって大工頭中井家に対して大工長左衛門から建築許可を請う願書がだされたが、近年は破風や向拝に彫物は禁止しているにもかかわらず由緒あるによって許容されている。神祇殿は、田中屋敷内でもかなりの規模の建物であったようである。同時に瓦葺の門と築地塀も新造され、威容を整えている。

神祇殿の建築にあたり、正月二十四日に手斧始の儀式が神主紀光俊を祭主に行われ、立柱式を四月二十日に、安鎮秘法を七月十二日、上

棟式は七月二十二日に行われた。上棟式は、田中家雑掌等が奉行として取り仕切り、宮大工は大東長左衛門を中心に角田作兵衛・井上茂左衛門が従い、儀式後の散米・餅蒔きは、平岡弥吉があたった。この時田中要清四十九歳であったと棟札裏書は、記録している。

同年八月四日の遷宮式³⁶⁾では、八幡三所に武内社・末社を遷し、行列には、松明をかがげながら、八幡・武内社・惣末社の御幣を先頭に、所司が散米するなかを、雑掌の小寺内匠好重が鈴を振り、次に神宝所の藤原元経が御劔を捧げ、兵庫頭大石高継の弓矢が先導して、薄衣で覆った羽車に要清・神主光俊が従う。鳥居前庭上にて巫女一人に神楽男五人で里神楽が奏され、遷座後に神供、要清による奉幣と光俊の祝詞奏上に庭上にて清祓が行われ終了した。田中邸内の鎮守八幡宮と神祇殿開創には、田中家家臣だけでなく、石清水の神官神人等も参列して、賑々しく執り行われた。田中邸において、宗源神道を祭祀する場は整えられたといえる。なお、元禄二年（一六八九）三月には南都大安寺霊宝であった「三韓退治之御矢」が要清により献納され、八幡信仰の象徴たる霊宝が神祇殿宝物にもたらされた。³⁷⁾

六、田中旧邸図

ここでもう少し田中家邸内を見ておこう。石清水八幡宮には、「田中家旧邸図」⁽³⁸⁾（写真図版）がある。敷地は、南北惣間数五十間五尺七寸、東西惣間数五十四間五尺で、坪数は二千七百坪を優に超える広大な屋敷地である。図の天地を南北とし、南の四脚門を入ると鳥居があ

り、奥行き三間に廂一間の四間、六間の神祇殿は貞享二年の創建時と同規模である。その奥に本社、左右に末社を描く。神祇殿の周りには板縁があり、田中家本宅へ続く渡り廊下が取り付けられている。母屋の間取りと長屋や供待など屋敷内の建物が記され、畳敷・板間・竹縁・土間・敷石の別が墨引き彩色で色分けされている。本図には次の書き込みがある。

惣^前墨引彩色有之分

御代始 勅使 院使御休坊并饗応御入用

七社奉幣 勅使次官御休坊并饗応御入用

正遷宮上卿御休坊并参議并六府等饗応御入用

例年放生会御代参休所并饗応御入用

臨時祭女房御代参休所并饗応御入用

朱引彩色無之分御入用「無之間」御座候

○此色築上申度地形

本宅を見ると南からの長い敷石を通り六畳ほどの板敷は式台であろ
うか、八畳の玄関に、十六畳・十五畳が三間、十畳が三間、七・八畳・
九畳が六間、六畳以下の部屋が十間以上ある。母屋の北東の位置に清
所・料理場・台所が三十畳以上を占め、膳や酒の準備の場である。こ
れら墨引きで彩色されたところは、田中家屋敷が代始や七社奉幣・遷
宮や毎年の放生会に遣わされた勅使・院使・代参等の休息及び饗応所
である。朱引きで無彩色は、饗応などの御用には使用されないもので用

途や広さは省略されている。母屋の各所には、五カ所の湯殿が配されている。湯殿はそれぞれ上卿・参議・弁等の勅使が祭の参列の時刻に合わせて、同時に身を清め装束を整えられるよう設置されたと考えられ、田中家が勅使宿坊であったことの証左ともいえる。

先の「石清水全図」⁽³⁹⁾には、敷地の西南は円福寺が占めていたが、本図の同位置には、彩色されず白紙で表わされている。「○色築上申度地形」の○の中には彩色せず、無彩色の白紙を示している。西側の空き地様の土地は、建物等の施設を省略しているのではなく、建物そのものが存在しないと解釈できる。この無彩色は、屋敷の南と西にあり、浸水しやすい土地の高上げを願ったところであろう。田中邸内には円福寺があり、そこに祀っていた達磨像を南山の江湖道場の本尊として、妙心寺海門和尚を迎えて現在の円福寺としたのは、文化四年（一八〇七）であった。⁽⁴⁰⁾ そうすると年紀の無い本図は、円福寺が南山に移転された後、「臨時祭女房御代参休所」の文言から文化十年臨時祭再興以降の田中邸の景観を描いたものと推定できる。

七、要清の没年と神号授与

要清は一心を公武の祈祷に身を捧げ、かねてより神として祀られることを吉田神祇官に望んでいたと史料一の「武末霊社記」は記す。宗清は、亡父僧正要清の思いに応えて、元禄十二年（一六九九）七月廿七日要清霊号願のため吉田家を訪れる。「御広間雜記」同年九月三日には次のようにある。⁽⁴¹⁾

八幡社官田中宗清願^ニ付、内々送使在、子細者故田中要清霊社号^并可立小社之間、身体勸請者之義也、今日調^{云々}、札勸請也、御帳以下請事、如例御幣^{一前}箱^{二入}神聖箱書付等如常宗源宣命^{作新}宗源宣旨等箱^{二入}錦帳也、如例壇供^{一入}宝前^ニ供於宗源壇神道供養勤行左近ヲ召諸事申付神人伊賀又神事二從^{云々}

霊社号と小社建立、神体勸請の準備が整い、吉田神道卜部兼敬の名のもとで九月三日に、紀要清の御霊を「武末霊社」とする宗源宣旨が出された。遷宮は、神祇殿を仮殿とし、吉田家から派遣された鈴鹿石見守・大角壱岐守・山田伊織の三名が執り行った。この「武末霊社記」には、遷宮次第を記す。元禄六年五月朔日にすでに吉田神道の伝授を受けた鹿野与吉郎と、森元助左衛門が霊社の聖の宮を羽車に乗せ、下河辺権之助が練り絹で覆い、櫛を飾る。次に動座、遷幸、鎮座、神供、奉幣、祝詞、撤饌と続き、退下で滞りなく終了した。この遷宮が執り行われた九月六日をもって霊社の祭日として、田中家では毎年魚味等の神供献備が執り行われるようになった。

ところで、元禄六年は、本社修復による正遷宮の年で、遷宮式にあたって、朝廷より上卿以下が下向する。この勅使の饗応の宿坊を巡って、新善法寺家と田中家は争論となる。⁽⁴³⁾

田中宗清は、重服で宿坊を勤められないと新善法寺晃清から訴えられる。田中側からは、天正八年（一五八〇）以来宿坊を勤める事例を提出した。⁽⁴⁴⁾ 宗清の言分は貞享四年（一六八七）東山天皇即位時には、

その年二月に東竹召清が没し、養父の服中であつても、要清には御師職たるにより御祈禱の下知があつたといふ。⁽⁴⁵⁾ 田中家は御師職にて、いつ祈禱を命ぜられても神役勤仕できるよう、死穢産穢など不浄の時は別宅へ移り本宅は穢れないとして宿坊を勤めることを主張する。新善法寺からは、重服で自宅において饗応をつとめる社法は八幡宮にはない、元和年中の遷宮では祖父の田中敬清は服中で上卿に面会しない例などを挙げて反論する。若き宗清は長文の口上書きを認めるも、晃清からはさらに寛文年中の田中家饗応料の費用の増大に疑義が呈され、今度は晃清自ら遷宮料入用の吟味を行うと迫られる。下行米配分を手はじめとして、争論に乗じてこの時社務であつた晃清が一切を采配することを狙う老獪さである。同年九月三日争論の裁定では、田中家宿坊は認められず、善法寺宿坊の前例としないことで、争論当事者ではない善法寺央清に宿坊が命ぜられた。⁽⁴⁶⁾

この争論の発端である田中家の重服とは、要清の死去であつた。⁽⁴⁷⁾ 元禄六年（一六九四）正月二十八日要清は五十八歳で逝去したことが善法寺家伝来の「武末霊社記」によつて、はじめて明かされたのである。

要清には男子が無く、娘清子を津和野城主亀井豊前守茲政次男に娶せ田中家を継承したのが宗清である。宗清は、元禄五年六月に十八歳で得度、童参内した。同年十二月に宗清は、家臣の小寺喜六を伴ない吉田兼敬より宗源殿において十八神道伝授を受けた。⁽⁴⁸⁾ これ以降は田中家当主として要清に代わつて、宗清が担うこととなる。

武末霊社神号授与と邸内の小社勧請が行われた元禄十二年は、要清の七年忌にあたる。

八、神祇殿での祭祀

近世の社務家の日常的な宗教行為は、ほとんど知られていない。そこで石清水八幡宮所蔵の「社務日記」を取り上げる。⁽⁴⁹⁾ まず、日記四冊の記述年代と様式から整理し、年代別に①～④に仮に番号を付与する。①は表紙に「日記」の表題と左下に花押を書し、寛政八年（一七九六）七月朔日から同年十二月二十九日までを記録する。②は表紙に「日歴」の表題と花押、寛政十年七月十七日から同年十二月三十日までを記す。①と②の花押は相違するがこの二冊は、ほぼ毎日、次項別に一つ書きで記し、本文の筆跡は同じと判断できる。③文化十年（一八一三）は表紙に「日歴」の表題と花押が書されているが、欠損がある。正月から六月までの各月の巻頭に一つ書きで、件名目録と丁数を記し、月ごとの目録の後に毎日の出来事を正月元旦から六月二十九日までを記述している。④の文化十一年は表紙には「日歴」と「三冊之内、（花押）私記」とあり、巻頭に十月から十二月までの件名目録と丁数を記し、その後に毎日の内容を記す。③と④の花押は同一人のものと推定できる。①・②より、③・④は、件名目録と丁数で、後に参照するために見直しやすい体裁に変化している。著者については、④文化十一年の末尾に「終年無事殊更当年慶事重加□神恩同出執筆候事 権僧正（花押）世五才」の書き込みがある。文化十一年時点で権僧正と年齢から判断すると、これを記したのは田中由清（一七八〇～一八四九）であろう。⁽⁵⁰⁾ ①寛政八年（一七九六）の十月朔日には「御養生不被為叶申刻神退」とあり、寛政八年十月に逝去した養清のことを

記す。由清は、豊岡前中納言尚資の二男で、日野大納言資矩の猶子となり、養清に男子が無かったことから、養清女を室として養清の養子となる。①②の二冊は、同じ筆跡で自身の覚書らしく、判読困難な字体である。③・④ともに筆跡は等しく比較的丁寧に書き綴られている。①②と③④では筆跡や花押などに相違があり若干の疑義はあるものの四冊ともに、由清が書き記したものと推測している。寛政五年に十四歳で得度し、①②は、十六・十八歳である。③④では、三十歳半ばで、筆跡はある程度変化したと見てさしつかえなからう。とりわけ③の文化十年は臨時祭再興の年で、翌十一年も同様に内容が豊富である。本稿では、日記の中で男山山上本社殿ではなく、田中家が神祇殿で個別に行う祭祀についてみていく。

寛政八年七月の記述をみていこう。朔日から七日まで「御祈祷下官勤之」とし、毎日由清自ら祈祷を行い、五日は神祇殿の掃除を左衛門の補佐にて由清が行った。八日は、法園寺へ仏事に参詣し、十一日は、京へ上り広橋家へ面会のため、御祈祷は柏村左兵衛が代って勤仕する。十二日は初卯の使者に対応し、祝物を取り計らう。十五日小宮に勤仕し、撫物を奉納し、神祇殿神供・熨斗は如例。十六日御祈祷例の通り勤める。二十五・六日は星祭祈祷を行う。月の内前半、行事等が無ければ、田中家邸内にある神祇殿において田中家当主が自らほぼ毎日祈祷を行う。これは他三冊の日記でも同様である。

九月については、四日に宗源行法を勤仕し、五日には、明日の武末霊社御社祭のために神祇殿を清掃、万事用意する。六日には、卯刻に由清が御祈祷を済ませ、辰刻神祇殿庭上に各々集まり祭儀が始まった。

祭主は由清が勤め、式部・中務（森元か）・隼人（森元か）等十六名が参列し滞りなく昼には直会を勤めあげ、祭儀は無事終了した。毎年九月六日には、田中家当主が祭主となり邸内にある神祇殿脇にある小社武末霊社前で祭礼が行われていた。

なお、この武末霊社は、慶応四年戊辰の役で田中邸火災と共に焼失し、現在は田中家墓域内に社の礎石と文政十二年（一八二九）の石燈籠一対が残る。⁽⁵¹⁾

田中家が行う祈祷に対して寛政十年七月には、京都より書状で次のような依頼があった。⁽⁵²⁾

中宮御所女中、所勞^ニよつて御祈祷致呉候様、此節又々別^而重^キ由也、夫故態人^ヲ以申越候事、則於神祇殿病者加持行法修行

中高神札、中札常之御札且此度□依趣向、十種神宝加持
行法病氣平癒祈処、如行中札一枚添

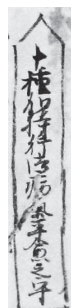
病氣加持之五色之祓串神札と共^ニ包、
且病体に向て不修故中高^ヲ小サく切

【図】

如図認誦文ヲ尚又図^ニ

書四ツ折^ニして奉書にて包





「十種加持行御病氣平癒之守」

如此調進して遣也

尤書狀にて右五色の串にて、病体ヲはらい、此御守ハ枕もとの清き所ニ御はりなさるへく様と申遣事

宮中女官の病氣平癒のために神祇殿で病者加持祈禱を行い、祓い串・神札・守札などを遣わしている。田中家では、禁裏や公家からの求めに応じて、神祇殿で祈禱した神札などを調進していた。

同年八月には神祇殿にて「御札押」と称し、放生会神札小高上を百枚、小高下を五十枚、牛玉札三十枚、太麻等各数十枚等を朝より夕方まで清火のもとで公文所や兼官片岡左衛門等をはじめ数馬・束・左内・幸右衛門等によって整えられていた。御所や有栖川・尾張藩をはじめ、田中家との交際のある前年の奉納者に配布されるものであった。⁽⁵³⁾

一方、神主紀美濃守光行は、文化十年（一八一三）より洛中洛外町在に石清水八幡宮厄除神札を弘めることが許されていた。⁽⁵⁴⁾ おそらく臨時祭再興を機に百姓町人をはじめ庶民に石清水信仰の浸透を図ったものであろうが、社務家より身分的下位者の神官がこれにあたった。また石清水八幡宮本殿前での神札配布は、本殿回廊で勤番役にあたる仕丁座神人が八幡宮本殿前や外院で行っており、一般参拝者にたいしては、神事諸道具の配置や境内清掃などの雑事を勤める仕丁座神人の役得であった。⁽⁵⁵⁾ 神札・守などの配布先は、交際範囲に反映した身分

的分別が明確であった。

むすびにかえて

社務田中家及び新善法寺家は、吉田神道に入門し、屋敷内の神殿において神道祭祀を行っていた。とりわけ田中家は、要清の家督相続と尾張藩との由緒により吉田家正統の直伝をうけ、吉田神道組織内部でも特別の地位を得ていた。

古来中絶している石清水御神楽・放生会再興が要清により果たされ、朝廷祭祀の復興を願う霊元帝にとっても、朝廷を取り巻く諸社の祭祀復興は朝廷祭儀の一環でもあった。⁽⁵⁶⁾

田中家では貞享二年、神祇殿が田中家の祈禱する祭儀場として建立された。吉田神道の一翼を担う田中要清が、石清水における朝廷祭祀復興をうけて田中邸内で宗源神道祭祀場としたのが神祇殿であった。田中邸は、遷宮等勅使を饗応する宿坊の機能をあわせもち、禁裏御師職の家職により公家衆とのつながりを持っていた。

石清水八幡宮が朝廷の命で行われる神事・祈禱は、伝奏広橋家から社務検校に伝達され、社務が石清水の僧俗神人各々に命じて勤仕を触れる。神前では祝詞奏上や神供については俗別当・神主・掾知の神官が祭主となり、神官系神人が従い、⁽⁵⁷⁾ これは石清水の本社殿において執り行われる。これに対して、田中邸神祇殿では、禁裏や公家衆、尾張藩主一門や縁戚に対して病氣平癒など私的な加持祈禱が吉田流修法によって執行され、田中家御師職のネットワークを形成していた。

文政二年（一八一九）十一月石清水山内に鳩嶺書院が完成した。その開講を記念して田中由清の神道講釈があり、文庫へ神祇殿に保管されていた神道関係の書籍が奉納されている。⁽⁵⁸⁾石清水において神道研究は田中家が主導的な地位を保持していたといえよう。

田中家は明治維新では、僧侶から還俗して石清水の神官に転身し、維新直後、旧来の神官家と争論になるが、現在に至る代々の宮司家として存続している背景には、吉田神道流祭祀に従事していた実績に裏打ちされたものであった。

なお、本稿では社務日記の祭祀関連記述の概要を示したにとどまった。内容全般の情報整理と分析が今後の課題である。

（二〇一六年十月三日受理）
（たけなか ゆりよ 文学部歴史学科 特任講師）

【註】

- （1）八幡市『八幡市誌』第二巻、一九八〇年。石清水八幡宮『石清水八幡宮史』首巻、一九九七年・第六輯、一九九五年、続群書類従完成会。『八幡地域の古文書・石造物・景観―地域文化遺産の情報化―』京都府立大学文化遺産叢書第四集、二〇一一年ほか

- （2）『石清水八幡宮放生大会記』（石清水八幡宮『石清水八幡宮史』第三輯、続群書類従完成会、一九九四年）。『行幸并公方様御社

参臨時莊嚴図」嶋村家文書箱二一五、八幡市教育委員会蔵、本文書は石清水八幡宮本殿調査に際して閲覧の機会を得た。

- （3）前掲（1）、「祠官系図 一田中系図・五東竹系図」

- （4）一四一三「田中家由緒覚書控」（『大日本古文書』家わけ四―四東京大学出版会、一九七〇年）。史料一【武末霊社記】（天理図書館 石清水八幡宮文書二一〇・〇八一―二〇三―二〇、翻刻番号一二〇七号）。史料二【田中家相統方二付届書】（正法寺文書八一八九）・史料三【田中家相統方二付請書写】（同七―二八六）・史料四【田中家相統出入二付請書写】（七―二八八）京都府立山城郷土資料館寄託。

- （5）田中要清得度は、「祠官家系図」では慶安二年十二月廿二日とするが、二月の誤記であろう。「権僧正要清算進之記」一〇五六（『大日本古文書』四―三）及び、前掲（4）「武末霊社記・「正法寺文書」では二月廿二日とある。

- （6）山下手正については、『城州八幡愚聞抄』（名古屋蓬左文庫蔵）に「一山下半三郎氏勝ハ信濃守ト号ス相應院様御妹婿ナリ、慶長七年源敬公三歳ニナラセ給フ、御時ヨリ御部屋エ被召出領秩千石、慶長十九年甲寅ノ都市十月御番頭ニ被仰付冬夏両度ノ大坂御陣ニ供奉シ武功アリトゾ、尤モ頓智聰明ノ人ナリト云云、氏勝ノ息山下手正氏政有故国除終于飛州高山城下（貞享元年子七月十八日云云）私云八幡ニ於テ山下道安殿分トテ知行廿石程ノ処アリテ久々御屋敷ニ御支配被成候処、元禄ノ比カ他エ御譲リ有之由シ記録ニ見タリ恐クハ山下氏先祖ノ知行ナルベシ追テ

可考」とある。一三一〇、「志水忠政外二名連署事書」(『大日本古文書』四一三)ほか、山下市正は、志水甲斐・岡本玄皓と共に田中家相続一件にかかわっている。

(7) 「御広間雜記」(天理図書館 吉田文庫、吉六四・一六〇)

(8) 石清水八幡宮宮守神人伴家文書二九三号(個人蔵)

(9) 前掲(8)、二九四号

(10) 前掲(8)、二九五号

(11) 前掲(8)、三一一号

(12) 前掲(8)、四二七号

(13) 前掲(8)、二九六・二九七号

(14) 前掲(8)、二九八・二九九号

(15) 前掲(8)、正保二年二九八〜三〇〇・三〇七・三二八〜三三七、正保三年三〇一・三〇九・三三八・三三九号

(16) 前掲(8)、三〇八号。交部氏については、「御広間雜記」承応三年を初出として向日神社社家交部氏が例年年頭挨拶などで吉田家を来訪している。交部は六人部と読めなくもない文字もあるが、向日神社の現神主家六人部氏との関係は、不明である。

(17) 「石清水八幡宮全図」(中井家文書三四二号、京都府立総合資料館蔵、京の記憶アーカイブ

(<http://www.archives.kyoto.jp/websearchpe/dispMedia/1352788/110501/getLSub>) 2016.9.

長濱尚次「男山考古録」嘉永元年(石清水八幡宮「石清水八幡宮史料叢書」一)

(18) 林家文書、山城郷土資料館寄託

(19) 井上智勝「近世の神社と朝廷権威」吉川弘文館、二〇〇七年、同「吉田神道野四百年―神と葵の近世史―」講談社、二〇一三年

(20) 平重道「吉川神道の基礎的研究」吉川弘文館、一九六六年、同

「吉田文庫『萩原兼従卿御遺言状』の一考察」(『ブリア』40)

(21) 岡田莊司「近世神道の序幕―吉田家の葬礼を通路として―」(『神

葬祭大事典』戎光祥出版、一九九九年)

(22) 幡鎌一弘「十七世紀中葉における吉田家の活動―確立期としての寛文期―」(『国立歴史民俗博物館研究紀要』一四八集、二〇〇八年)

(23) 『京都御役所向大概覚書』下巻、六「山城国寺社方間数御修復所之事」。前掲(16)「男山考古録」豊蔵坊

(24) 拙稿「近世石清水八幡宮の石高―新史料「八幡宮筆記を中心―」別表八幡山下分朱印状一覽」(『京都府立総合資料館紀要』三六号、二〇〇八年)。寛文五年八月十五日「徳川家綱当宮繼目安堵ノ朱印状ヲ出ス」八七〇頁、安居脇頭神人知行分(石清水八幡宮

『石清水八幡宮史』第六輯)

(25) 表1 万治四年三月十三日の条。寛文五年二月朔日の条ほか。

(26) 前掲(17)、「男山考古録」

(27) 前掲(7)、貞享二年十二月廿八日の条。翌年正月廿七日には要清から万丸(兼章)従五位下叙任祝を贈る。事あるごとに吉田家とは互いに贈答のやり取りがある。

(28) 「権僧正要清昇進之記」 一〇五六「後光明天皇口宣案、一〇六

三「神主光俊祝詞」(『大日本古文書』四一三、二六五・二七五頁)。五〇八「新善法寺晃清善法寺央清連署口上書案」(『大日本古文書』四一六、六一四頁)

(29) 「要清法印神樂再興勸進文」石清水八幡宮文書杉雜五一・一九、石清水八幡宮藏

(30) 長濱尚次「石清水神樂本末」明治二年(石清水八幡宮文書追加目録通番一六四一・御文書収蔵番号八二)、石清水八幡宮藏

(31) 「継日記」石清水八幡宮文書杉五一一、石清水八幡宮藏

(32) 前掲(17)、「男山考古録」

(33) 前掲(17)、「石清水八幡宮全図」

(34) 「神祇殿指図上棟始終之記」石清水八幡宮文書杉雜一五二、石清水八幡宮藏

(35) 大工角田氏については、正法寺書院(宝永五年、大工馬場町角田徳兵衛尉吉次)、正法寺方丈居間(宝暦八年、工匠棟梁角田作右衛門藤原正友)(建築文化研究所編『京都府指定文化財正法寺書院修理工事報告書』、一九八九年。京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財正法寺本堂修理工事報告書』、一九九二年)にその名があり、文久三年石清水本社廻りの末社再建に「大工小頭角田忠兵衛常茂」がある(八幡市教育委員会・石清水八幡宮『石清水八幡宮諸建造物群調査報告書』図版編、棟札銘)。角田氏は代々地元八幡で活躍する大工である。

(36) 「神祇殿遷宮記」石清水八幡宮文書杉雜一六一、石清水八幡宮

藏

(37) 西中道「三韓退治之御矢」(『石清水八幡宮展』松花堂美出館展示図録、二〇〇七年)

(38) 「田中家旧邸図」年未詳、紙本彩色、石清水八幡宮藏

(39) 前掲(17)、「石清水八幡宮全図」

(40) 前掲(17)、「男山考古録」

(41) 前掲(7)、元禄一二年七月二十七日の条。同年九月三日の条。前掲(4)「武末靈社記」

(42) 前掲(7)、元禄六年四月二十一日の条に「八幡之田中坊々先日家来鹿野与吉郎加行之儀願上候処、御伝授被遊可被下との御事、忝存候、則与吉郎今日指上候間、宜仰被付可被下との事也、為御見舞耐一折書状到来」とあり、同年五月一日の条で、鹿野与吉郎は、宗源殿で十八神道を伝授されている。

(43) 「遷宮上卿御宿坊之儀新善法寺田中争論之書付」一一〇六「田中宗清口上書案」、一一〇七「新善法寺晃清口上書写」、一一〇八「田中宗清口上書案」(『大日本古文書』四一三)

(44) 「石清水八幡宮遷宮御参向御宿坊之近例」(石清水八幡宮文書松一七)『続石清水八幡宮史料叢書』二、六七頁、天正八年から貞享四年までの事例を、「石清水遷宮御参向御宿坊之近例」(天理図書館 吉田文庫、吉三五・八九)天正八年から寛文六までの事例を記す。

(45) 新善法寺家と田中家は、貞享四年東山天皇即位の祈禱でも争論があった(「一社一同祈禱之儀二付候一件」一三五九「口上之覚」、

一三六〇「八幡郷中触書案」田中御師職として伝奏より祈祷の命をうけ、要清から山上山下僧俗神人等へ申付けた。社務検校新善法寺晃清は、一山一同への触れは、社務より出すものと公文所に全郷内へ触れ改めさせ、一山僧侶残らず召し寄せ厳重に言い渡している。この年二月二十二日に養父田中召清六二才で没し、四月に要清は服中에서도祈祷執行している。九三一「広橋家雑掌河端景福伝達書」・『大日本古文書』四一三。この事は元禄九年の争論でも田中側の先例として訴えており、要清の事績は後々にも影響を与えている。

御社造営成就之次令再興
之□御家内繁栄御祈祷
永代常燈之油料被附置
者也

文政十二_{己丑}年三月

奉行鹿野讃岐能沖

一一〇九「伝奏広橋家雑掌口上書」・一一一〇「善法寺央清請文写」『大日本古文書』四一三

御師職服忌の事例に触れるためか要清の没年は、「祠官系図」等に記されず、神霊故にか田中家墓地（法園寺管理）には墓石を残さない。本稿作成にあたって、石清水八幡宮及び善法律寺のご厚情により田中家墓地内墓石調査の機会を得た。祠官系図で記録されない田中家歴代の没年が判明した。検校補任年月日と合わせて、別表2に「田中家歴代生没年」を掲載した。

前掲（7）、「御広間雜記」元禄五年十二月四日の条

「石清水八幡宮社務日記」石清水八幡宮蔵、

前掲（1）、「祠官系図 一田中系図」

前掲（47）、石燈籠一対のうち東の一基の銘文を掲出する。

（正面）「武末霊社」

（裏面）「御前之燈籠二基今度

（51）

（49）

（50）

（52）

（53）

（54）

（55）

（56）

（57）

（58）

（59）

前掲（49）、②寛政十年七月二十五日の条

前掲（49）、②寛政十年八月八日の条

『京都町触集成』九卷、文化九年十二月 六〇一。同文化十年三月 六三五・六三六。文化十年三月十五日の臨時祭初年では、御幣通行の道筋に無作法・葬礼不浄・牛馬の通行を禁止、石塔石仏類の目障り物を薦等で隠すよう触れが出され、朝暮ともに臨時祭再興に協調的な時期であった。岡本和真「石清水・賀茂臨時祭再興に貫る一考察」『神道宗教』二三六、二〇一四年）

拙稿「嶋村家神札・護符等の版本と青山祭祭壇図」『八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図―地域文化遺産の情報化―』京都府立大学文遺産叢書大三集、京都府立大学文学部、二〇一〇年）

米田雄介「朝儀の再興」『日本の近世』第二卷天皇と将軍、九一年）。並木昌史「延宝七年石清水放生の再興」『国学院雑誌九六・七、一九九五年）。武部敏夫「貞享度大嘗会の再興について」『書陵部紀要』第四号、一九五四年）。『神々の美の世

（51）

（49）

（50）

（52）

（53）

（54）

（55）

（56）

（57）

（58）

（59）

界―京都の神道美術―』京都国立博物館特別展会図録、二〇〇四年、放生会再興後の正徳五年に、雅楽器一式が靈元法皇により奉納されている。

(57) 拙稿「近世石清水八幡宮の所司発給文書にみる神人身分―六位禰宜森本家旧藏文書を中心に―」『京都府立大学学術報告』人文第六十七号、二〇一五年

(58) 「社士日記」文政二年十一月十七日の条、個人蔵、

一 御文庫并二集会所皆出来二付 今昼後講釈始有之候間、御出被成候ハ、為御知可申との事

右今日講釈始二而田中権僧正由清様 神代巻と中臣拔と講釈被成候事、次ニ森元回藏論語講釈被致候事、山上之僧衆四・五人、松本・瀧本・岩本・中ノ坊・森元回藏・伴逸記・栗津将監・神原西市・山田兵部・花井七兵衛尉・片岡範祐・長濱新吾・神原信濃・溝口越後・溝口黙之助・山田太市・柏村左兵衛・谷村伊平・谷村遠江其外社士中四・五人右之通山田々間、田中様々御文庫へ奉納物有之、田中様神祇殿有之候

鳩嶺書院は、森元回藏はじめ七名の社士の尽力により、文化十二年八幡宮三の鳥居西に開設された学問所である。書籍の貸出や講義が行われた。

本稿作成にあたって、石清水八幡宮西中道氏・京都府立山城郷土資料館田中淳一郎氏・善法律寺住職松浦康昭氏・谷村勉氏・天理大学附属

図書館・益子ヨシ子氏、他にお名前を揚げられなかった多くの方々に
ご協力を頂いた。末筆ながら謝意を表す。

年	月日	人名	概要
	4.8	田中坊要清	聴聞
	8.13	田中要清	見舞、海神霊社御正忌
	10.21	田中坊要清	見舞
	12.24	田中坊要清	歳暮
	2.4	八幡新善法寺御礼	見舞
寛文 6	1.13	田中坊	見舞
	5.17	田中要清	使者到来、見舞
	7.3	田中坊要清	見舞
	7.12	豊蔵坊	神道伝授を願う
	7.13	豊蔵坊	不叶の返答
	8.13	田中要清	海神霊社七回忌、参詣
	12.3	田中要清	見舞
	12.4	佐野内蔵之丞	八幡牛蒡贈答使者也
	12.14	八幡社	正遷宮
	12.27	田中要清	歳暮
寛文 7	1.12	田中要清	年頭挨拶
	4.28	田中要清	見舞
	12.11	田中要清	見舞
寛文 8	1.13	田中要清	年頭挨拶
	4.7	佐野長兵衛	年頭御礼
	5.19	田中要清	見舞
	5.21	男山八幡宮神主吉村斎宮、向日大明神交部権少輔・岡本仙甫	贈答
	7.25	田中要清	見舞
	9.24	神原喜右衛門	烏食用許容
寛文 9	4.3	田中要清	年頭挨拶
	8.13	田中要清	見舞、海神霊社忌
	12.25	佐野内蔵之允	歳暮
	12.27	田中要清	歳暮
寛文 10	1.13	田中法印	年頭御礼
	2.5	佐野内蔵允	年頭御礼
	4.13	田中坊要清	海神霊社月次之御参也
	6.5	佐野内蔵允	祝儀
	8.4	田中坊	婚礼祝儀の返礼
	8.10	田中坊	御礼
寛文 11	1.10	田中要清	年頭御礼
	1.16	佐野内蔵允	年頭御礼
	3.13	田中要清	見舞対面、海神霊社へ御社参
	9.17	八幡社人紀斎	贈答
	10.21	田中要清	見舞
寛文 12	1.13	田中要清	御礼
	2.7	佐野内蔵允	年頭御礼
	5.20	田中要清	贈答、神代講談召加御礼
	6.8	田中要清	贈答、神代講談下巻今日満
	閏 6.24	田中要清	来訪
	12.26	田中要清	歳暮
寛文 13 (延宝元)	1.3	佐野内蔵助	年頭御礼
	1.10	田中要清	御礼
	1.18	田中要清	御礼
延宝 2	11.17	石清水神主紀斎宮	来訪
	12.8	田中要清	見舞
	12.27	田中要清	歳暮

「御広間雑記」の記事抜粋にあたって、平成 15 年度～ 17 年度科学研究費補助金基盤研究研究成果報告書『吉田神道家「御広間雑記」の記載項目データベース化と神道記録の研究』を参照した。

表 1

年	月日	人名	概要
慶安 3	4.13	真如堂宮内卿八幡之社人	神供之備様相伝仕度使入来
	4.15	八幡大森六右衛門	初御礼、礼物送る
	12.26	八幡之与九郎	歳暮
慶安 4	2.4	八幡新善法寺御礼	初御礼対面、伴与九郎取次。萩原様へも御礼
慶安 5	1.13	八幡与九郎	牛蒡贈る
	1.26	大森六右衛門	料足廿疋持参
承応 2	1.25	大森六右衛門	牛蒡贈る
承応 3	2.10	大森六右衛門	牛蒡贈る
承応 4	1.29	大森六右衛門	年頭御礼、牛蒡
明暦 3	7.23	大森六衛門	見舞
明暦 4 (万治元)	1.13	大森六衛門	年頭御礼
	1.23	田中要清	宗源行事、兼従より伝授
万治 2	1.15	大森六衛門	年頭御礼
	7.29	田中要清	来訪
	8.24	田中要清	入来、尾州八幡社人十八神道伝授為
	9.12	田中要清	見舞
	9.19	田中要清	来訪
万治 3	1.8	田中要清	年頭御礼、杉箱入扇子贈答
	2.15	田中要清	来訪
	2.17	田中要清	神道伝授、切紙渡す
	2.18・19	田中要清	神竜百五十年正当出仕
	4.24	田中要清	来訪
	5.3	田中要清	来訪
	5.4	田中要清	尾州熱田社人等と壇場へ拝参
	6.3	田中要清	来訪
	8.1	田中要清	来訪
	9.21	田中要清・松田如閑	来訪
	9.25	田中要清・松田如閑	来訪
万治 4 (寛文元)	10.1	田中要清・松田如閑	来訪
	10.2	松田如閑	見舞
	3.12	松田如閑	来訪
	3.13	松田如閑	松平三位様使者同道
	3.21	松田如閑	八幡入院、内室当山へ御出
	3.26	田中坊	先日の御礼入来
	5.19	田中要清	来訪
	閏 8.25	田中要清	来訪
	12.4	田中要清	来訪
	12.8	田中要清	歳暮
寛文 2	1.16	田中要清	年頭御礼
	4.1	田中要清	見舞、左京方へ使礼到来
	5.29	田中要清	見舞
	6.4	田中要清	見舞
	7.28	田中要清	使者を以てお見舞い
	8.12	田中要清	神海霊社三回忌参詣
	11.7	田中要清	贈答
	12.15	田中要清	歳暮
寛文 3	1.9	田中要清	年頭御礼
	1.14	田中要清	祝言、使者鈴鹿内膳
	6.24	田中坊要清	見舞、使者
	7.28	田中要清	江戸より着、入来
	11.1	田中坊要清	贈答
	11.15	田中坊要清	近日江戸へ下向挨拶
寛文 4	12.24	男山八幡田中坊	歳暮
	2.1	田中要清坊	年頭挨拶
	4.29	田中坊	使者到来
	7.6	田中要清	見舞、使者到来
	8.13	田中要清	見舞
寛文 5	2.1	田中要清	年頭御礼、交部権少子息権之助召連

史料一【武末靈社記】（天理図書館 石清水八幡宮文書）

①

武末靈社記

一 武末靈社者田中廿一代權僧正要清魂也、
件之要清者幼年之比子細之儀有テ、母正壽院
相共ニ暫ク尾州ニ在住ス尾陽之太守源敬公同
光友卿之膝下ニ成人ス由緒ハ源敬公御母堂
相應院殿之依為親族也 相應院殿ハ
東照宮大権現安室也
一要清十三歳ニテ得度 童名久米丸
慶安二年二月廿二日 戒師ハ
青蓮院宮社法之規式童昇 殿得度以後
参 内事畢テ当社之巡拝奉幣等整之
得度已下規式之用途為尾陽之沙汰五百兩
之黄金ヲ催シ整之則為附人山下乡正家士 沼田孫十郎
志水甲斐家士 杉崎伊右衛門 此二人在京沙汰也
山下乡正
志水甲斐 其二 相應院殿之依有由緒也
殿上ニテハ武蔵局取計之 要清婦 悉ク事嚴重ニ
整ヒ要清尾州ニ帰ル此間田中廿代召清法印
相統之 要清ハ善法寺有清法印ノ弟之 于時為尾州
之沙汰召清ヲ東竹ニ移シ要清本家ヲ相統
是廿一代 要清ハ田中家ノ正統也
廿五歳 于時要清
三月十五日本家ニ移ル、神前ニ祇候シテ悦之奉
幣慶賀悉ク整之、瑞籬之下ニテ詠一首要清

②

神葉のゆふかひありてことしより心のまゝに神につかへん
此一首ヲ詠シ神前ニ仕奉ル事片時ノ怠リナク
朝夕之歩ミ異リ于他星霜久敷絶シ 御神樂
放生会ヲ再興シ依為 朝家之御師職
公武之丹誠不怠一心ヲ神ニ抛テ鎮ニ神タラン
事ヲ願フ生涯之内神ニ祭ラン事ヲ吉田神祇官ニ
望ム任有例神祇長許容ス、于時元禄六年
正月廿八日要清卒ス 行年五十七歳 然ルニ某宗清
亡父之所願難默止吉田ニ靈社ヲ願テ神祇官
存生之願度々ナル事ヲ不捨今又願フニ許容シテ
則武内宿祢之依為苗裔武末靈社ト贈成ス
元禄十二年九月三日要清魂武末之神ト成シ璽
第先靈社ニ從ヒ吉田ヨリ下向之人々
鈴鹿氏ハ吉田一ノ家臣
兼敬之命ヲ靈社ニ扈從ス
件之三人蒙神祇道管領長上三位侍從ト部朝臣
神祇殿ヲ仮殿トシテ移之、夜ニ入り遷宮ス尤件ノ
三人始終行之

鈴鹿 石見守
大角 壺岐守
山田 伊織

正遷宮次第

先刻限於仮殿祓加持

次御動座

次遷幸

次御鎮座

次神供

次奉幣

次祝詞

次撤神膳

次退下

此次第鈴鹿石見守手跡之

一 仮殿ヨリ社江之道路筵薦ヲ敷キ其上ニ

白布ヲ引

一 璽ノ御筥羽車ニ奉乗 鹿野与吉郎 森元助左衛門

練絹ヲ覆ヒ榊ヲ飭ル 駕輿之ヲ 下河邊権之助

御遷座之間消火

各着浄衣

③

(印) 宗源

宣旨

紀要清魂

右宣号武末靈社者

神宣之啓狀如件

元禄十二年九月三日 神部伊岐宿祢^奉

神祇道管領長上正三位侍從卜部朝臣兼敬(印)

④

「維元禄十二年歲次己卯九月六日吉日良辰乎以^天

掛^{毛起}畏^起武末靈社^乃広前^{仁美}恐^{美毛}申

夫靈神^者武内宿祢^乃末葉^{仁与}世奉仕

八幡宮^利自壮爭暴神国之古風^比歸正

直之根元^与直受吾道之秘匿至老^{満天}

祈万代之宝祚^利愜公武之時宣^{天永}

遺神事之跡加称職帶檢校^志官至僧

正^{利与}紹陸家速之中絶^{多留}御神樂^平相統

久廢^{多留}放生会^平再興^須是併夙志願

力^乃所感其心影響^乃如之今茲励振七回

忌辰^{仁天}位^天孝嗣宗清僧都法印方忝^{久靈}

神^乃顧命^{仁天}任^天神祇管領正三位侍從

卜部朝臣兼敬^{仁天}造^天武末^止靈号^平授^利

神代^乃正仰^平以遷鎮^女広^久渥^久称辞竟

奉^留此狀^平平^{介久}安^{介久}聞食^与弥^与一天安全

四海平定風雨順時五穀能成殊^{仁波}雄立古

山^乃蔭益茂^利伊和志水^乃流不絶^{志天}守護

幸賜降止申寿

辞別仁申吉時仁參集留輩乃中不慮外仁

穢氣不淨乃事不信怠慢乃過利有止毛無

咎亦無出所愛愍納受於垂賜降止恐美恐

美毛申寿

⑤

一武末神事九月六日依之靈社之祭モ九月六日

祭之神供魚味備之

一榊葉之歌ハ成清法印新古今ノ歌ノ心ヲ取テ

讀之坎

一当社家僧正拜任之事、放生会御神樂再興

依為要清社務僧正 勅許於当社謚信

以來ノ初例也、尤神事再興之賞ト云々

善法寺・新善法寺モ依此例翌三年僧正拜任也

一宗源ノ宣旨同祝詞此二通大和錦ニテ

是ヲ包ミタル蘿ラシ宮入り社内ニ納ル記之二

スル二通ハ案也并御幣木綿手襷篋二入り

納之璽之篋秘々

一翌年九月武内二位惟庸靈社に參詣奉幣

有之、幣料方金一片

石灯籠二基

元寿院

石盥鉢壹

片岡頼母照俊

靈社成就之義於有之ハ一品調進有度

所存ニテ白銀拾兩殘之、照俊死後調之

方金貳片

紀主水光俊上

青銅五拾疋

全昌寺環溪

同断

巢林庵棟山

菓一折

東竹法印象清

同断

海靈老閑

青銅貳拾疋

片岡宇右衛門

同断

惣一 かね

神酒兩樽

能村成然

昆布一折

能村成然

干瓢一折

吉田新長谷寺

菓一折

玄智

方金一片

松本坊

菓一折

慶春菴

此外川口村・美豆村其外彼是後蘭之品々上之

一武末靈社祭日当日赤飯甘酒塩魚味此外彼是

調之、親シキ衆中饗応、勿論美豆川口不殘

被下之、靈社御鎮座初之故也

一事済已後吉田家江之御礼宗清出京

白銀五枚吉田殿江神酒兩樽添之

白銀貳枚

鈴鹿石見守江

金子式部百正 大角部岐守江

同断 山田伊織江

同 百正 新長谷寺玄智

一祝戸紀主水光俊役之

案 吉田ヨリ来

一要清卒テヨリ七年ニ相当ルノ年

霊社及此沙汰

返々石見守并神人等

祝義指下候被入念候義与

一昨日は預来賀

存候、主水へも一伝申度候

殊目録の通給

病中候故書中別而

幾久与受納候

無正体候間、可有火中候也

先以今度霊社

造立珍重二候

於武末霊神は

在世以安申談

当道信仰候事は候得共

別而各別ニ存候処

首尾能霊社

鎮座之事豊々

歎喜候、猶重而

可令参社候先

表賀儀太刀一腰

馬一疋入見参候

万々期後音時候也

謹言

侍従三位

九月十六日

兼敬

田中宗清御房

⑦

「たらちねのねかひしまゝに たけすゑの

末のすゑまであふく御社

ふしておもひおきてもいのる 武末の

宮井のめくみひさしかれとそ 紀久子」

(紙継部分にあり)
「七」

⑧

「榊山かしこき石の

御社に

はこふあゆミの

おとそかれしき

元寿院」

⑨

「武末の霊社遷座のとき

よみてそなへ侍る

志水

瑞籬のひさしかれとそ

武末の

いくすえかけて

いろひ

そめてき

⑩

「武末の霊社鎮座のとき

この所をそのかミ榊山と名付

られしことを思ひいて、

院卓

賢木山ひらき初にし

そのかミの

ミやゐふとしく

たてる御社

⑪

「

幾秋もかハラぬ色の

榊山尔三古ふ立初る

宮井かしこし

家の風つたへましく

末々もまもりさいはい

給ふなるべし

婦日

⑫ (包紙力)

「

田中宗清様御時 鹿野与吉郎 柴座住人
片岡左衛門尉 経師甚兵衛能直 (花押)

右一軸表紙宝永二西六月十五日仕之也

社務善法寺僧正

*①②は、料紙の差異等により著者が注記した。別表1に寸法・紙質等を記す。

史料二【田中家相続方二付届書】(正法寺文書)

一相應院様御母公者、田中長清娘^{ニ而}御座候^ニ付、田中家之儀、志水御家と者御間柄故、尾張様分諸事奉蒙御憐憫愍罷在候、然所右長清孫

田中敬清義、病身故善法寺幸清次男、則敬清妻之弟を養子^ニ仕候、是を田中召清と申候、右召清養子^ニ仕候後、実子久米丸と申もの出生仕候、敬清義寛永十七年死去仕候後、久米丸并母正受院と召清と間柄不宜候付、正受院義、幼少之久米丸を召連尾州^{江被下}相應院様御由緒を以御歎申上候所、御慈悲を以久米丸義尾州^ニ被為留置

源敬公光友公御膝下^ニ被差置、慶安二年二月久米丸儀得度仕候様被仰出尾州^江御指登被遊、右為用途金子五百両被下諸事賄、御附人として志水家^江杉崎伊右衛門、山下乡正殿^江沼田孫十郎被相添、久米義二月廿二日童参

内仕、其夜青蓮院宮^ニおゐて得度仕、要清^ト相名乗、右得度相済直^ニ尾州^江帰申候、万治二年

光友公御下知被 成下田中本家を要清^ニ相渡候^而、召清儀之隠居可仕旨、御下知状被成下、召清^江金子五百両被下、本家知行之内百石隠居料^ニ仕候様被 仰付、召清儀隠居仕、東竹^ト称申候、要清夫より田中家相統仕候、右要清尾州^ニ罷在候内、広太之奉蒙御慈悲、数多之拝領物等仕候^而、恐多儀^ニ御座候得^共、要清判者

綱義公御直筆^ニ御定被成下候御儀^ニ御座候^而、要清儀幼少^キ厚^キ御慈悲を以田中家相統仕候儀^ニ付、今^ニ至り毎年始御祈祷并五月・九月・歳暮・放生会・初卯御神楽等之御祈祷相務、大麻御洗米御札等連綿仕差上來候^而、御祝儀御初穂等拝領仕候御事御座候

一要清田中家相統仕候節、被成下候御下知状之趣田中殿後室公事暖之

〔朱筆〕「正受院事^ニ而御座候」

近世石清水八幡宮における吉田神道の受容と社務家

事

〔朱筆〕「久米丸事^ニ而御座候」

一田中殿より後室并御兄^ハ之わけ分之事、寺領余慶も無之処、方々^ハ御わけ候ハ、田中殿可為御衰微候間、寺領并家屋敷財宝一円田中殿御支配可致候事

一田中殿実子出来候ハ、大納言殿御無沙汰有間敷事

一田中殿御家之儀、相應院殿由緒も有之事^ニ候、其上少々寺領方々^ハ御わけ候ハ、御勝手も成ましく候間、後室之儀^ト大納言殿御合力可被遣事

〔朱筆〕「久米丸儀尾州^江被指置候内者久米松と被召候御事」

一田中殿^江久目松代継養子^ニ被遣上ハ、正受院久目松^江少もかいほう有間敷事

以上

慶安二年丑

正月十三日

玄皓

書判

山下市正

書判

志水甲斐守

書判

八幡

善法寺殿

右善法寺^者田中召清兄、正受院為^二も兄^三而御座候故、善法寺当^二被成下、召清奉畏御請申上候^二付、同年二月久米丸得度被^二仰付、尚尾州^二被指置其間御命を以上京、吉田家^二於ゐて神道奥秘伝受被^二仰付恙相濟候上、万治二年召清へ金子五百両被^二下置、本家知行之内百石隠居料^二仕東竹^と称隠居仕、要清儀^者田中本家相統仕候様^と被^二仰付候^而、要清義難有田中家相統仕候御事^二御座候^二右之通奉蒙^二御厚恩御事^二御座候、以上

史料三【田中家相統方二付請書写】（正法寺文書）

（端裏朱筆）
「田中家相統一件書類三通」

覚

一 今度 大納言様御意を以、久目松養子^二仕候^二而、前廉山下市正・玄皓を以、御一門書被下候、右数ヶ条之内、おきよ私縁辺之儀、御断申上候処^二無用^二可仕^二御意之旨并正受院久目松^江かいほう不被申様^二と申上候処^二其通^二可被仰付候忝奉存候事

一 田中家屋敷財宝不残私支配^二可仕之旨、其上正受院^江御合力被遣、殊私実子^も出来候ハ、大納言様御如在可成ましき^二御意之旨難有仕合御座候

一 久目松得度之儀 大納言様分被仰付可被下候内、重畳過分至極^二奉

存候、久目松儀致養子^二惣領^二仕上ハ少^も疎略^二存まし^く候、久目松にたいし、私無沙汰仕様^二自然脇分被聞召上候ハ、其旨被仰聞何分^二被遂御穿鑿可被下候事

右之趣御頃日を以、可然様^二御取成所仰候、以上

慶安二丑

正月十三日

志水甲斐守殿

山下乡正殿

玄皓老

田中

召清 判

史料四【田中家相統出入二付請書写】（正法寺文書）

今度我等後室^と出入之儀 大納言様被為人御念、和談^二被^二仰付、色々蒙御意過分至極奉存候、殊敬清実子久目松、私養子仕、田中之家相統いたし候様^と、御意弥忝奉存候、此上ハ猶以田中之家相統仕度^と存心中^二御座候間、田中之家旧記其外家^二付候書物之儀、少も無沙汰なく、脇^江洩不申様仕、久目松^江讓可申覚悟^二候、右之通

八幡大菩薩少も偽^而無御座旨左様^二御心得被成可被申候、後日^二何角と世間雑語も御座候へハ私不屈之様^二各可被思召と存、如此御座候、

以上

慶安二年

八幡田中

丑ノ正月十七日

召清 判

志水甲斐守殿

山中市正殿

史料五【田中家相続出入二付和談書写】（正法寺文書）

一 八幡田中後室と和談之事

一 後室爰元^江被参候間、家屋敷藏不殘田中殿^江被相渡候様^ニと御異見被成候へハ何様^ニも御意次第^ニ可仕と可申事

一 後室被申候ハ、田中之家継候へハ満足申候間、日比之遺恨^者存ましきと被申候事

一 御答^ニハ何之儀も後室左様^ニ被申候間、田中殿をハ教^敬清養子之事^ニ候間、教^敬清子息御兄と之田中殿養子^ニ仕、尤之由、御答候事

一 右之条々合点^ニ候ハ、則相渡可申候旨、旧記以下之儀相改、慥^ニ受取、旧記其々目錄仕判をいたされ、甲斐守方迄相下し可被申候事

一 合点^ニ候ハ、後室^ニも誓紙をか、せお兄^ニも教^敬清同事^ニ親と可存之由、誓紙をか、せ可申事

一 右之通後室^ニ誓紙をか、せ候うへハ、田中殿^ニも誓紙書候て尤^ニ御答へも誓紙^ニハ、世継之子^ニ可仕儀少も無沙汰仕ましき事、か様^ニ御書候ハ、善法寺・新善法寺^ノ御兄を田中殿跡取之養子^ニ被仕由、連

近世石清水八幡宮における吉田神道の受容と社務家

判^ニ御かき甲斐守所へ報可被申候事

一人之目にもあまり悪敷御兄^{ニ而}候ハ、此方^江可被申候、其節談合可申候申迄ハ無之候へ^共、能々御かわゆかり可有候事

十月五日

志水甲斐守

新善法寺殿

善法寺殿

田中殿

史料六【神祇殿指図上棟始終之記】（石清水八幡宮文書）

（竊書）

「宝永貳年補之

神祇殿指図上棟始終之記 中井主水正裏書」

掛^毛畏^幾八幡三所宇豆^乃広前^尔法印^{要清}恐^美恐^{見毛}

申^弓申^{作久}往古^{与利}朝廷^乃御祈願所^{多留}依^弓

宗源^乃齋殿^乎建立^弓神威^乎増^志奉^加為^尔今日

貞享^{二乙}年正月廿四日^{己未}刻^乎吉日良辰^止撰定^天

木作始^乃規式^乎整^倍神供清酒^平備^{江幣帛}於

捧持^弓奉祈禱^留此状^乎聞食^{与利}事始^{与利}功成就^尔

至^{留麻出}風雨火災^乃難無^久公武安靜^尔家内無恙^久

當作乃巧匠等手伝乃奴無事久無故久年来乃

素願乃任々經營成就志千世万代毛不動不朽常磐

堅磐尔神祇乃大業子孫尔伝家風長奈江尔不絶

事春秋序乃尔無窮良之女賜倍止神主光俊乎

以尔恐尔見茂申寿

辞别尔作久今日奉勤仕神人巧匠等不思外乃不淨

有止毛広普深慮乃任々見免志聞許志玉豆

惠幸賜倍止申須

神祇殿旨棟札裏書之扣

維当歳次貞享二乙丑七月廿二日神祇殿上棟乃規式乎整備

玉女神五方龍王及棟上柱下乃諸神達尔清酒種々乃

幣物奉備玉槌尔虹梁乃上打納之女白餅乎

蒔波之女竜君雨宝降尔准桑弓蓬矢遠

以四方禊清奉利五方鎮護乃棟牘乎自書豆

后代龜鏡尔遺抑當家者武内数世乃苗裔鳩嶺

礎石祠官止之天朝家乃御師職多留仁依弓往古与利我

大神敷地乃裡崇祀礼礼然止毛其地狹隘奈理因

茲下官願發之豆甘有余年来地利乃全考倍西南

尔移志広高久志築止伊倍戸毛財乏久德拙久歷星霜乃所尔

寛文尔故法皇後水尾院叡聞尔達黄金乎賜御社乎

修補奉留其後旦夕思之豆不忘此願力神尔通之君尔

感志今年内春宮秋宮乃御息氣乎懸賜比敷將

尾張国主源中納言光友卿及御家門千代姫君・源少将義昌・源少将義利・源中将綱誠卿・二丸船解由小路御方恩沢乎

蒙利尔次都鄙男女乃塵乃志不捨又自力年来貯乎以豆

正月廿四日巧匠乃事始志卯月廿日柱礎立七月十二日安鎮

秘封之同廿二日辰刻上棟神祇殿宇并四足御門築

地御清所功成礼利下官元来唯一神道五十三代下兼從尔

從豆三事乃證明授久依之三壇行法乃神器已下波

年々月々尔調進之所奈利此营造乃功尔依豆鎮主

神殿神庫家宅常磐堅磐尔子竹孫松永伝豆神

威乎輝志鼻祖乃神脉乎正志宝祚遠長天下

泰平於奉祈利尾陽侯家運乎千歳万歳可禱者

奈理慎而莫怠矣

奉行者當門雜掌等也

宮大工中央樫大東長左衛門

東ノ角田作兵衛

西ノ井上茂左衛門

散米餅蒔役平岡弥吉

貞享二乙丑年七月廿二日時辰

神祇殿御上棟之次第

玉女神御幣三本散米足打清酒跳子

次棟之神酒餅柳樽一荷柳樽加倍

看

次棟之槌 三所一同^ニ打之<sup>長左衛門
作兵衛門</sup>

神酒瓶子一對

桑弓^{信布} 蓬矢^{雁俣}

東 銚子 加倍

扇子 六十六本
麻 六十四分

蒔餅 五百八十七

中央 散米 足打

柳樽 一荷

昆布 六十六本

鯛 十式枚

御殿之上^ニ布敷之^{三垂}

西 瓶子 一對

同弓^{同矢} 同矢^{同矢}

次柱本之御幣^{三本}

柳樽一荷

備物 肴^{昆布}
鬚斗

赤飯

蒔餅役 散米 弥吉

已上

掛^毛畏^幾鳩嶺^乃神德^於御^{氣波}弥高^久石清水^乃

流^於汲^波益潔^志夫^{我家波}朝家普代^乃御師^{奈利}

奉祈於宝祚事長久農嘉業也然あれ者

近世石清水八幡宮における吉田神道の受容と社務家

先祖より敷地の内尔^吾皇神武内の社を
勧請せり朝なにはぬかつき夕には尊之
奉る就中て^{下官ハ}神道三事の秘訣卜部
兼従より証明を請たり、星をかそへ霜を
つので願を興し 内春宮に申し権門に
告てことし貞享二とせ^乙の睦月より
神祇殿を営ミはしめ同し文月のすへに
たくミの功なれり、去延宝には古法皇今の
中宮の御息をかりよそへて御上葺をなし
破壊を、きなひ奉るといへとも漸御扉高欄の
辺とりもさめこ、かしこ小破せり、此次てを
もつて修補をくわへ今日の今宵を吉時日と
撰定て 三所并武内惣の末社をもとつ御
褥に遷し奉る御殿の柱には御鉾木綿紳を
もて飴り御劔弓矢等の神宝を先立て御幸の
粧ひを厳にし山野海浜の珍味を儲[□]供御
神酒を備へ奉り広庭には乙女か鈴を振らしめ
調子をそろへて百里千里にひ、かせ蒼生の心
までもあな面白く和くならん此状を秋の
男鹿の八の御耳に聞し召八の御幡の伊豆く
しきには八極を靡し公武は東西に日月の
光をならへ有情非情其所を得農民は野に
うたひ市人ハ手を打て不偽旅人は置郵心に

まかせて恐もなからんをや、神殿の内には日本に
有としある諸神達残りなく降臨し給ひて

願主紀法印要清神主光俊等をして申太のりこと

を聞し召ことには徽若の昔日成長となし

此度すら御心をそへ給ふ尾陽国主光友卿の

御子葉門枝次には塵の志しを加へ奉る輩

内戚外戚家内の男女境内被官の奴等牛馬の

蹄に至まで守り幸給ひて自火余煙の

難を除き鬼神方位の怪しミもなく竜君は

宝雨をそゝきて万品の性を潤し子竹孫松ハ

官録寿命心にまかせて実の忠ことを神に

つくさしめ給へ

辞別_尔申_{佐久}祇今参集_{留輩乃}中_仁穢気

不浄_{乃者有}善言美調_{乃祓於以}豆_清女_{奉留}

上_者神直日大直日_{乃神止}見免_志聞許_之給_{倍豆}

恐_美恐_{美毛}申_寿

貞享二_乙八月四_壬申日_酉時

「築地・惣門・宗源神殿・八幡宮・武内社・惣末社立面図」

八幡山田中法印

宗源殿_{梁間三間}表_二惣間_一榊御拝有

但虹梁ノ上_二古キ幕股彫物用

「宗源殿立面図」

「宗源殿平面図」

右之通宗源殿御建立被成度由

法印御願被成候細工可仕候哉奉伺候

貞享二年_丑正月

八幡山大工
長左衛門（印）

御棟上之役人之事

御幣九本 一人

御多羅枝 二十二二人

矢二筋 鷺羽

志たし 二人

御盃 一人

御梯子御加 二人

御槌金銀 一人

当宮御 槌

大永五_{乙酉}年十二月十八日 藤原小倉
元廣（花押）

（裏書）
「表絵図破風并御拝之事近年

雖為停止依由緒有之御許容之

問細工仕者也

貞享二年丑二月十六日

中主水（印）

大工

長左衛門」

別表1 史料一武末霊社記の寸法・紙質等

	料紙その他の特徴	寸法 (cm)	紙数
①	黄褐色薄手	27.2 × 115.2	3 紙
②	楮紙カ	31.0 × 41.1	1 紙
③	宗源宣旨写	31.1 × 44.4	1 紙
④	祝詞写	31.0 × 44.8	1 紙
⑤	黄褐色薄手 (①と同質)	27.2 × 122.5	3 紙
⑥	書状、折紙	1.5 × 44.6	1 紙
⑦	和歌懷紙	31.0 × 42.4	1 紙
⑧	和歌懷紙	31.0 × 42.6	1 紙
⑨	和歌懷紙	31.0 × 42.6	1 紙
⑩	和歌懷紙	31.0 × 44.2	1 紙
⑪	折紙	30.9 × 44.7	1 紙
⑫	包紙カ	30.9 × 33.7	1 紙

別表2 近世田中家歴代生没年

田中家歴代	生年	西暦	検校補任	西暦	没年等	西暦
田中秀清	天正 5 年	1577	慶長 5 年 6 月 11 日	1600	元和 5 年 6 月 1 1 日、43 歳	1619
田中敬清	慶長 6 年	1601	寛永 9 年 8 月 12 日	1632	寛永 17 年 8 月 2 日 (イ 12 日)、40 歳	1640
田中召清	寛永 2 年	1625	—		貞享 4 年 2 月 22 日、63 歳	1687
田中要清	寛永 14 年	1637	延宝 3 年 10 月 15 日	1675	元禄 6 年正月 28 日、58 歳	1693
田中宗清	延宝 3 年	1675	宝永 6 年 3 月 26 日	1709	享保 7 年 9 月 8 日、48 歳	1722
田中久清	元禄 8 年	1695	—		享保 20 年 7 月 24 日、41 歳	1735
田中正清	享保 6 年	1721	元文 5 年 5 月 10 日	1740	享和元年 3 月 10 日、81 歳	1801
田中養清	寛延 3 年	1750	安永 5 年 4 月 2 日	1776	寛政 8 年 10 月 2 日、47 歳	1796
田中由清	安永 9 年	1780	文化 15 年正月 22 日	1818	嘉永 2 年閏 4 月 14 日、71 歳	1849
田中農清	寛政 9 年	1797	—		文政 8 年 4 月 14 日、29 歳	1825
田中修清	文化 12 年	1815	—		安政 5 年正月 24 日、44 歳	1858
田中昇清 (有年)	嘉永 2 年	1849	文久元年七月十日	1861	明治 19 年 4 月 10 日、38 歳	1886

生年は没年・事績等より逆算した。没年齢は祠官系図の記載を優先し事績から逆算したが、誕生月や異本による誤差が生ずる場合がある。

田中家旧邸図 (石清水八幡宮蔵)

近世石清水八幡宮における吉田神道の受容と社務家

